「慣用句の本当の意味」

三年六組　亀山和輝

今から、三つの慣用句についての話をします。

まず一つ目は、「犬猿の仲」という慣用句です。この慣用句は、仲の悪いことという意味で、「A君とB君は犬猿の仲だ。」などと使います。

ところで、「犬猿」とは、「犬」という字と「猿」という字を使います。「桃太郎」という昔話では、一緒に鬼退治に行きましたが、実は仲が悪かったのかも知れませんね。桃太郎の話から考えると、犬猿の仲と言われる人たちでも、意外と仲が良いこともあるでしょう。

次は、「目に入れても痛くない」という慣用句です。これは、「とてもかわいく思う」という意味で、「うちのペットは目に入れても痛くない」などと使います。目薬は目に入れても痛くないから目薬はかわいいのかと思う人もあるかも知れませんが、これはあくまでもたとえなので、目薬がかわいいというわけではありません。また、いくらかわいいペットなどでも、目に入れれば痛いし、目に入ることはありません。このように、慣用句には、比喩表現などが使われていることが多く、そのまま考えてしまうとまったく意味が分からなくなったり、違う意味で勘違いしてしまうかも知れません。

最後は、「口をとがらす」という慣用句で、これには、思うようにならないときの不満の表情という意味があります。ちなみにぼくは野球部なのですが、作戦を失敗してしまって清水先生の口をとがらせたことが何度もあります。ところで、くちばしがある鳥のように、口がとがっている動物はいつも不満を持っているかというと、そういうわけではありません。この慣用句も、先ほどのように、あくまでもたとえなのです。

このように慣用句は、そのままではまったく意味が違うこともあるので、間違えて使って相手の口をとがらせないよう、気をつけましょう。